

第 82 回日本放射線技術学会総会学術大会 開催にあたって

公益社団法人日本放射線技術学会代表理事
石田 隆行



日本放射線技術学会の会員の皆様におかれましては、平素より本学会の学術活動および社会的な取り組みに対し、格別のご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

この度、2026年4月16日（木）～19日（日）にパシフィコ横浜において、JRC2026の一環として第82回日本放射線技術学会総会学術大会が開催されますことを、代表理事として大変誇らしく喜ばしく思っております。本大会の開催に向け、2年以上にわたり企画・準備に尽力されてきた林秀隆大会長、谷畑誠司実行委員長をはじめ、実行委員会、専門部会、関係委員会の委員の皆様へ深く敬意を表します。

本大会のテーマ「Radiology Connectome」は、放射線医療を中心として、臨床現場、研究、教育、技術、さらには国際社会へと広がる多層的な「つながり」を象徴しています。臨床の現場で生まれる課題や疑問が研究へと発展し、その成果が再び医療を向上させるべく現場に還元されていきます。この新しい知の循環こそが放射線技術学の発展を支え、学会の存在意義を形づくるものです。本大会は、そうした循環を可視化し、分野や世代、国境を越えて共有する場となり、次の時代へつなげていく絶好の機会になると確信しています。

今年の総会学術大会では、演題登録数が例年を上回り、国内外から数多くの演題が寄せられました。海外からの研究演題も数多く発表されることは、本学会の研究活動が国際的にも評価され、JRCの目標としている国際性高い学術大会の場としての役割を着実に高めている証であり、学会の成長を強く感じています。多様な背景をもつ研究者・技術者が一堂に会し、活発な発表と討論を行うことにより、新たな視点や協働の芽が生まれ、将来の研究や臨床実装へと発展していくことを大いに期待しています。

代表理事として、私は、本学会が「臨床に根ざした学術性」と「次世代を育てる学会」であり続けることが極めて重要であると考えています。医療を取り巻く環境は急速に変化しており、AI（人工知能）やデータサイエンスの進展、医療技術の高度化、国際化の浸透、専門の深化などに対し、学会自体も適応し進化していく必要があります。そして、学会は、研究成果を発表する場にとどまらず、研究に挑戦する人を支え、学び直しや専門性の深化を後押しし、得られた知を社会へ還元するための基盤でなければなりません。

また、学会運営においても、持続可能性と開かれた姿勢が求められています。多様な立場の会員が主体的に参画し、議論を重ねながら学会の方向性を共有していくことが、放射線技術学のさらなる発展につながると考えています。研究によって新しい知識を獲得し、それを社会に役立てていくためには、会員の皆様の未知に挑戦する力が必要です。本大会での活発な議論や交流が、学会の将来像や改革を導く重要な契機となることを大きく期待しています。

特に若手会員および学生の皆さんには、本大会を「発表の場」とすると同時に、「人とつながり、未来の研究へと広げる場」として積極的に活用していただきたいと思います。日常業務の中で抱いた素朴な疑問や問題意識は、放射線技術学を前進させる重要な出発点です。発表や質疑応答、世代や分野を超えた交流を通じて視野を広げ、自らの可能性を確かめ、次の一步へとつなげてください。本学会は、皆さんの挑戦を支援し、ともに成長していく場であり続けたいと考えています。

本学会は、会員一人ひとりの主体的な参加と研鑽によって支えられています。ぜひ多くの会員の皆様へ本大会にご参加いただき、世代や専門領域を超えた交流を通じて、新たな知と価値を共有し、放射線技術学のさらなる発展に寄与していただきたいと思います。

横浜の地において、多くの皆様と直接お会いし、新たな「Radiology Connectome」を共有できることを、心より楽しみにしております。